

90 誌上発表

『鍼法秘伝抄』について

岩田源太郎

日本鍼灸研究会

旧大塚修琴堂文庫所蔵の刊本『鍼法秘伝抄』(以下『秘伝抄』)1巻1冊は、漢字カナ交じり文の袖珍本の鍼書である。題箋には『(意齋扁鵲)針法秘伝鈔(打針経針)全』、内題は『鍼法秘伝鈔』とあり、識語によれば貞享二年(1685)に刊行されている。著者は未詳であるが、序文には「御菌意齋の嫡男である意三の術が失われる事を弟子が嘆き集選した」とある。また跋文に「本書は扁鵲の経針と意三流とを合わせたもので、腹部の鍼穴は意齋流、その他の鍼穴は扁鵲の経針と心得るべきである」とある。よって、意齋流、意三流、扁鵲流を複合させてなったものであることがわかる。なお、本書はこれまで油印本やタイプ印刷で刊行されたとはあるが、一度も影印されたことはないと思われる。

『秘伝抄』は一連番号のふられた全96項目で構成されている。内容は、大きく3部に分けることができる。①第1~41項目は総論部分にあたり、治療に際しての心構えや注意事項などについて述べている。②第42~95項目は臨床各論で、病證別に主治穴、手技(補瀉など)、刺入深度などを平易に述べている。③第96項目は「針立処之図」と題されていて、鍼穴の部位について6枚の鍼穴図(仰人3図、背人1図、側人1図、腹部1図)に40箇所(箇所)の鍼穴が表記されている。鍼穴図には主治は書かれているが、穴名などはほとんど見られない。なお腹部の図の後にのみ、3条の説明文が置かれている。鍼穴図に続いて16穴の主治證が箇条書きされている。この16穴は頭部と腹部の穴に限定され、頭頂から腹部に向けて配列されている。

本書には鍼法の記載はあるが、灸法の記載は見あたらない。刺鍼の手技については、補瀉に加えて「針ヲ刺シ血ヲ細々取ル」(第70項目)などがあることから、瀉血を行っていたことがうかがえる。刺入深度は、2分から1寸の深刺も見られるものの、そのほとんどが5分以内の浅刺であった。一病證あたりの選穴の数は、1穴から9穴まで幅があるが、その多くは5穴前後である。これらのことから、少数の穴を選んで浅い鍼をしていたことが分かる。

第1~95項目で使用されている鍼穴は、70穴であるが、このうち、『十四経發揮』に見られる穴名は17名で、それ以外は、身体の部位名(「両耳上」など)を使ったり、穴や特定部位(ほとんどが鳩尾)からの距離(「鳩尾ノ下一寸」など)で表現されている。最も所出回数が多い穴は百会穴の14回で、三陰交、上腕の6回、更に章門、足三里、十四ノ椎の5回と続く。脈状は、浮、沈、遅、数、濡の五種の脈状がみられ、脈診部位では寸口の記載が確認出来た。

『秘伝抄』の内容は、扁鵲真流の『扁鵲真流鍼書』と類似している。この2書の内容を比較すると、『秘伝抄』全96項目の内、41項目は『扁鵲真流鍼書』からの完全な引用であり、18項目でも一部の引用が確認できる。よって跋文に従えば、残り37項目が意三流ということになる。ただ『扁鵲真流鍼書』では『十四経發揮』に見られる穴名を用いていることが多いのに対し、『秘伝抄』では上記の様な特異な表現となっている点に大きな違いがある。

本書からうかがえる鍼法は、江戸初期流派の特徴である100穴前後の常用穴よりも少ない70穴程度の穴で運用されているが、病門と選穴の表現方法は、江戸初期の特長を継承していると言えることができる。また意三流と扁鵲流は元来、その出自を異にする流派と考えられるが、本書においてその両派が複合されていることは、それなりの理由があるとも考えられ、興味深い。意三流と意齋流の関わりについては、今度の検討課題としたい。